

第一次大戦中のドイツの国家社会政策 (一)

—— ヴイルヘルム・グレーナーと戦時社会政策 ——

山田高生

- 一 はじめに
- 二 ヴイルヘルム・グレーナーの生い立ちと軍隊生活
 - (1) 少年期とシュヴァーベン環境
 - (2) シュヴァーベンの士官学校時代とベルリンの軍事大学校時代
 - (3) 鉄道局時代とシュリーフェンの影響
 - (4) 参謀本部の鉄道部門責任者としてのグレーナー
 - (5) 開戦とグレーナー……………以上、本号
- 三 大戦初期における軍部の社会政策
- 四 戦時局と祖国補助勤務法
- 五 むすび

一 はじめに

ビスマルク後のドイツ社会政策に関する研究としては、すでにわが国でも紹介されているカール・エーリッヒ・ボルンの優れた業績がある。⁽¹⁾しかしボルンの研究対象は、第一次大戦前の国家社会政策の展開に限定されたものであり、第一次大戦中の「戦時」社会政策にまで及んでいない。おそらくボルンは、ビスマルク失脚後から第一次大戦勃発前のこの時期に、その後のドイツ国家社会政策の源流を見い出していたと思われるが、しかしワイマル期の経営協議会や戦後西ドイツの労使共同決定制などドイツ国家社会政策を特徴づける労働政策を取り上げてみても、――確かにその源流を第一次大戦前の労働者委員会に見い出すことは可能であるとしても――ワイマル期と第二次大戦後へ継承されるほどの方向性は未だ定かではなかった。この点、ハンス・トイテベルクのドイツ産業共同決定史の研究に見られるように、⁽³⁾第一次大戦の祖国補助勤務法下の労働者委員会や中央労使共同体の形成までをワイマルから第二次大戦後に継承される共同決定制度の先駆形態と見る方が適切であるように思われる。とはいえ、トイテベルクの研究方法は、労使共同決定の思想的及び制度的な成立史に限定されたものであり、その時代その時代の政策担当者と利害グループとの諸関係のなかで織りなされる政策形成過程の一環として考察されたものではなかった。そこで以下の研究では、ビスマルク失脚後の国家社会政策の展開を第一次大戦終了時まで延長し、戦時の労使共同決定制度の成立をこの時代に固有な政策形成過程の中で考察することによって、この制度の歴史的意義と限界を明らかにするよう努めたいと思う。その場合ここでも、これまでの私のドイツ社会政策史研究の手法に従って、戦前のベルレープシュ、ポザドフスキに続いて、第一次大戦中の国家社会政策の担

当者であったヴィルヘルム・グレーナー (Wilhelm Groener, 22. 11. 1867—3. 5. 1939) の戦時社会政策を中心に考察を試みたい。グレーナーこそ、ヒンデンブルクとルードドルフによって構想された祖国補助勤務法の成立と実行の直接の責任者であると同時に、戦後のドイツ社会を方向づけた有名なドイツ中央労使共同体協定 (シュティンネスレーギーン協定) に先だって取り交わされた一九一八年一月一〇日のグレーナー—エーベルト協定の一方の当事者であったからである。第一次大戦の後半からワイマル期にかけて大きな役割を果たしてきた人物であるにもかかわらず、わが国ではこれまでほとんど知られていなかったという事情を考慮して、以下では、まずグレーナーの生い立ちと軍隊生活を紹介することから始めることにする。

- (1) Karl Erich Born, Staat und Sozialpolitik seit Bismarcks Sturz—Ein Beitrag zur Geschichte der innenpolitischen Entwicklung des deutschen Reiches 1890—1914, Wiesbaden 1957. カール・エーリッヒ・ボルン (鎌田武治訳) 『スマルク後の国家と社会政策』法政大学出版局 一九七三年
- (2) 山田高生「ベルレプシュと「新航路」の社会政策——ドイツにおける労働者委員会の立法化に関する考察」(上)(下) 成城大学『経済研究』第二二二号 (昭和四〇年一〇月)、第二二三号 (昭和四一年三月)。同「ルール石炭工業の労働関係と一八九二年プロイセン鉱山法改正」(一)(二) 成城大学『経済研究』四四四号 (昭和四八年一月)、四九九号 (昭和五〇年三月)。一九〇五年プロイセン鉱山法の改正における義務制労働者委員会については、山田高生「後期ボザドフスキの社会政策」(二) 成城大学『経済研究』第一一七号 (平成四年七月) 参照。
- (3) Hans Jürgen Teuteberg, Geschichte der industriellen Mitbestimmung in Deutschland — Ursprung und Entwicklung ihrer Vorläufer im Denken und in der Wirklichkeit des 19. Jahrhunderts, Tübingen 1961, "Soziale Forschung und Praxis", herausgegeben von der Sozialforschungsstelle an der Universität Münster, Dortmund.

第一次大戦中のドイツの国家社会政策 (一)

Band 15. 山田高生「ハンス・J・トイテベルク『ドイツ産業共同決定史』成城大学『経済研究』第二〇号(昭和三年一〇月)

- (4) グレーナーは、一八九九年に参謀本部付きの大尉に昇進して以後、一九一二年には中佐、一九一四年に野戦鉄道部長に就任した。彼は、この時期に培われた知識と組織能力によって、戦争勃発の際の進軍の展開を摩擦なく行うことに成功した。一九一六年には新設の戦時食糧庁の役員に任命され、戦時社会政策にかかわるようになった。その後、戦時局の長に就任し、祖国補助勤務法の成立と運営を指導したが、やがてルーデンドルフ(Erich Ludendorff, 1865-1937)と対立したため、一九一七年八月にこのポストを解任された。一九一八年に、彼は東部戦線の参謀総長に任命された。敗戦の混乱のなかで、一九一八年一〇月二六日にルーデンドルフの後任として、第三最高軍司令部(Oberste Heeresleitung)の主計総監(Generalquartiermeister)に就任し、部隊の撤退と復員を指揮した。さらにグレーナーは、エーベルト(Friedrich Ebert, 1871-1925)と共同して、軍と社会民主党(SPD)を新しい国家秩序の枠内で組み合わせるために努力した。しかし彼は一九一九年九月三〇日に辞任し、その翌年に『世界戦争とその問題』(Wilhelm Groener, Der Weltkrieg und seine Probleme: Rückschau und Ausblick, Berlin 1920)を執筆した。ワイマル期には、グレーナーは一九二〇―二三年に中断をはさんで運輸大臣に就任した。そして一九二八年から一九三二年五月までは国防大臣、さらに第二次ブリュニング内閣では一九三一年一〇月から内務大臣も兼務した。しかし彼は、右翼の急進化に反対し一九三二年四月にナチスの突撃隊(SA)と親衛隊(SS)の禁止のきっかけをつくったため、彼はシュライヒャー(Kurt von Schleicher, 1882-1934)と衝突し、ブリュニング(Heinrich Brüning, 1885-1970)の失脚とともに一九三二年五月三一日に国防大臣も内務大臣も辞任した。

グレーナーに関する文献としては、グレーナー自身の『自伝』(Wilhelm Groener, Lebenserinnerungen: Jugend, Generalstab, Weltkrieg, herausgegeben von Friedrich Frhr. Hiller von Gaertringen, mit einem Vorwort

von Peter Rassow, Neudruck der Ausgabe 1957, Osnabrück 1972, Deutsche Geschichtsquellen des 19. und 20. Jahrhunderts, herausgegeben von der historischen Kommission bei der bayerischen Akademie der Wissenschaften, Band 41) の『オセカ』 Dorothea Groener-Geyer, General Groener: Soldat und Staatsmann, Frankfurt a. M. 1955 及び Helmut Haussler, General Wilhelm Groener and the Imperial German Army, Madison, Wisconsin, 1962 がある。ロイターナ期を中心としたグレーナーの研究として、Gerhard W. Rakenius, Wilhelm Groener als erster Generalquartiermeister: Die Politik der Obersten Heeresleitung 1918/19, Boppard am Rhein 1977、⁽¹⁾ 最近刊行された Johannes Hürter, Wilhelm Groener: Reichswehrminister am Ende der Weimarer Republik (1928-1932), München 1993 がある。

二 ヴィルヘルム・グレーナーの生い立ちと軍隊生活⁽¹⁾

(1) 少年期とシュヴァーベン環境

一六五一年までさかのぼることができる旧家グレーナー家の一部は、ドイツ南西部の町ウルム(Ulm)周辺の村と、他の一部はハイデンハイム(Heidenheim)近郊にあった。本稿の主題であるヴィルヘルム・グレーナーは、ハイデンハイム近郊の方のグレーナー家の出身であった。グレーナー自身、誇らしげに「私は生粋のシュヴァーベ⁽²⁾人として感じている。」と述べているように、祖父のシヒャエル・グレーナー(Michael Groener)も、父親のカール・エドゥアルト・グレーナー(Karl Eduard Groener)もシュヴァーベン地方のルートヴィヒスブルク(Ludwigsburg)の住人であった。母方の実家であるボレク(Böck)家もまた、ルートヴィヒスブルクにあった。そしてこのルー

トヴィヒスブルクで、一八六七年一月二二日に、ヴィルヘルム・グレーナーは両親の第三子として生まれた。しかし二人の姉は、彼が生まれる前にすでに死亡していた。

ところで、彼の父親は一八六六年と一八七〇—七一年の戦争では、第一ヴェルテムベルク騎兵連隊の補給係長として従軍した。一八七一年以後は、第五ヴェルテムベルク近衛歩兵連隊の主計としてウルムで暮らした。しかしグレーナーによれば、父親は、もし一八五三年に六年の兵役に召集されなかったら、おそらく軍役以外の別な職業に就いていたろう。「父親は、職業については幸せではなかった。彼の能力が生かされなかったからである。彼が狭い金銭上の関係から出られなかったことが重荷となったのである。」⁽³⁾両親の家庭は財産がなかったので、わずかな俸給で暮らさなければならなかった。母親は、お料理上手の、家事切り盛りが上手な人であった。しかし、このような両親の家庭でのグレーナーの心はかならずしも満たされたものではなかったようである。後にグレーナーが語ったところによると、「自分は、今になって、自分の両親は優れた心情を持っていたということができる。私の父親についての私の最も早い思い出は、正直についての訓戒であった。母は、一度、私が嘘をついたことを父親に言いつけた。そのために、私は野蚕にも鞭で打たれた。このことは、私を大変悲しませた。それは、肉体的痛さのためではなく、私の母親が間違えたからである。この罰のため、長年の間、私は両親との関係がしっくりいかなかった。それは、私にとって、罰を与える前には別の側面をきくという処世上の一つの教訓となった。」⁽⁴⁾われわれは、このような少年時代のグレーナーの心情が、後になって彼が社会政策を取り扱う際の手法のなかに投影されているのを見ることができるのである。

グレーナーは、古い町であるウルムと、それとは対照的に静かな、緑に囲まれたルートヴィヒスブルクで学校

時代を過ごした。しかしグレーナー自身、「私は、模範学生ではなかった」と述べているが、そのためか彼の学校生活については、『自伝』の中でもほとんど述べられていない。むしろ、シュヴァーベン（4）の環境の方が、学校よりも多く彼の生活態度を規定したようである。当時のシュヴァーベンの人々との暖かい人間関係について、グレーナーは『自伝』の中で次のように語っている。「人間同士の付き合いで、当地ほど強いところはどこにもない。子供の頃から、特殊な南ドイツの社交好きが私を取り巻いた。そしてそれへの性癖を私は両親から受け継いだ。今日では多くのことが変わってしまったが、しかし私の青年時代には、友人と知り合いとの付き合いは、狭い家のような形は、南ドイツにしかなかった。」北ドイツでは、付き合いは排他的であり、身分と社会階級によって分離された。「シュヴァーベンでは、居酒屋の庭にある長いテーブルに、手工業者、官吏、工場主、学者、そして将校、女性も子供も、すべての住民が相互に並び、互いに入り乱れて座った。このような自由気ままなやり方で、あらゆる身分の人々の間で活発な意見交換が行われた。そしてそれぞれが、他の職業の喜びと心配を認識した。南ドイツの民主的な雰囲気は、その一部はこのような培養基からも生じたのである。このような形での全住民との出会いは、私の成長に少なからぬ影響を与えた。自分の生涯のなかで、将校に対するのと同様に他の人に対して理解をもつことができたのは、そのような出会いがあったからだ。⁽⁵⁾」

さて、グレーナーが一二歳のとき、一八八〇年一月一日に両親はルードヴィヒスブルクに引越した。グレーナーは、ウルムとその近郊から美しい印象を受けとったが、ルードヴィヒスブルクでの生活もグレーナーに大きな影響を与えた。彼の職業選択もここで決まったのであった。彼は、九年制ギムナジウムを終了後、ベルリ

ンで士官候補生試験を受験する決心をした。グレーナーによれば、職業軍人という職業選択は「わが家のつましい財政状態にある役割を果たした。将校の職業は、今日と同様当時も、急速な自立への可能性を提供したのである」⁽⁶⁾。かくて一八八四年の秋に、グレーナーは試験を受けるために、ベルリンにやってきた。これは、彼の最初の大きな旅行であった。試験に無事合格し、一定の訓練を経た後、一八八七年一月二二日の彼の一七歳の誕生日に、つまり可能な限り早い時点で、グレーナーは両親の家を去り、ケーニヒス・ロックに移った。彼は、「谷間の営舎 (Talakense)」と呼ばれた第三ヴェルテムブルク歩兵連隊第Ⅱ大隊の士官候補生部屋で軍隊生活を始めた。その後一八九一年以降、彼はアルト・ヴェルテムブルクの連隊に移った。

(2) シュヴァーベン⁽⁷⁾の士官学校時代とベルリンの軍事大学校時代

「士官学校時代は、私の最も美しい青年期の思い出の属する」⁽⁷⁾。一八八六年九月九日に、グレーナーは少尉に昇進した。そして九月末には、若干の同僚とともに、シュヴァーベン⁽⁸⁾グミュント連隊第Ⅲ大隊の勤務を命じられた。新しい勤務は小さな駐屯部隊であったが、グレーナーによれば「駐屯部隊 (Garrison) が小さければ小さいほど、それだけ住民との接触が一層強くなる。このような理由からも、グミュントでの歳月は、私の最も素晴らしい思い出である。……われわれは、若い人たちから、この小さな、しかし繁栄している産業都市の経済的及び社会的状態について様々な洞察を得た」⁽⁸⁾。いたるところで、彼は市民と知り合いになり、彼らのグループのものを学び、理解するよう努めたのであった。しかしこのような付き合いのなかで、政治のことが話題になったことはなかった。「政治は、われわれの存在においていかなる役割も演じなかった。……われわれは、みんな敵格な

君主主義者でした。勿論シュヴァーベン的特色を有していたが。軍隊は、勿論、カール王について正しい関係を持たなかった。彼は、彼の晩年には全く引退していたので、国民から遠く離れていた。彼の夫人であるオルガ皇后が、その態度と心情において真の皇后であった。彼女は、その慈善によってヴェルテムベルク人の敬愛を集めた。これに対し「われわれの王であるヴィルヘルム二世は、カール王とは対象的に、将兵の性質と卓抜な騎手であった。そして特別に、われわれルードヴィヒブルク人には親しみがあつた。彼は、皇子の時、彼の最初の夫人であるマリー・フォン・ヴァルデック・ピールモンント (Princess Marie von Waldeck-Pyrmont) とともに、この地のヴィラ・マリーンヴァール (Villa Marienwald) に住んでいたことがあつたのである。」⁽⁹⁾「われわれは、日曜毎に連れだつて教会に出かける夫婦を見たり、家族と散歩をする姿を見かける機会が多かつたので、「将校たちは、この王と内面的に結びついていると感じた」のであつた。

他方で、グレーナーは、この頃から、高級士官の養成を目的とした軍事大学校 (Kriegsakademie) の入学試験の準備を始めた。そして一八九三年の春に、彼は陸軍大学の試験に合格し、秋には陸軍中尉に昇進した。この時から、ベルリンの軍事大学校での新しい生活が始まつた。当時のベルリンについて、グレーナーは次のように書いている。「他の都市は、より美しく、より古かつたが、ベルリンには刺激があつた。とりわけ、古いベルリンの性格がもっと多く残っていた当時では、である。」「九〇年代のベルリンでは、人間の一定の満足感と政治的な安心感について語られた。文化的生活は、おそらく種々な欠陥を示した。私は、その一つとして、まさしくこの数年に軍隊においても次第に広がりつゝあつた過度の社会的要請をあげることができるとは、精神的分野でも、ユダヤ人の見方を広げようという、まだ支配的ではないが、すでに存在している見方も、これに教えることができる。」⁽¹⁰⁾

このベルリンでの最初の二年間は、彼は、軍事大学の勉強よりもむしろ、自分の知らない世界を見物してまわり、一般の教養を身につけるよう努めた。そして三年目から、彼は専門的な勉強に取り組むことになる。陸軍大学の教官のうちでグレーナーの人格と軍事的思想の発展に深い影響を与えた人物は、メッケル将軍 (Klemens Wilhelm Jakob Meckel, 1842-1906) であった。メッケルは参謀本部の次長で、日本陸軍の再組織者としても有名であった。しかしメッケルは、グレーナーが卒業する前に大学校を辞めた。「これは、大学校にとって大きな損失であった。」とグレーナーは後に述べている。⁽¹¹⁾

(3) 鉄道局時代とシュリーフェンの影響

一八九七年四月一日に、グレーナーは参謀本部付きの中尉として転属の命令が下りた。新しい配属先は、一般にはほとんど評価されない地形測量課 (Topographenteilung) であった。この課と鉄道課は、地味で非常に苦勞が多い課であると思われていたが、しかしグレーナーと若い同僚たちは、「モルトケのような人も、シュリーフェンのような人も、最初は地形測量の仕事から始めて出世したのだということ、自らを慰めていた。」⁽¹²⁾ しかしここでの仕事は、土地と住民についてのグレーナーの知識と視界を広げるのに大いに役だった。地形測量課の時代は、彼にとって精神的ばかりでなく物質的にもプラスになった。

ところで、その後グレーナーは、鉄道局への冬の分遣隊に配属されることになった。この転属を、彼は「私の軍人としての生涯にとって決定的であった」と回顧しているが、それは地形測量課員としての経験から西部進撃を取り扱うセクション II a のメンバーに参加することになったからであった。セクションの長であったシュター

ブス少佐 (Major Strabs) は、確かに気難しい紳士ではあったが、グレーナーには感じが悪かった。グレーナーは、自分に割り当てられた仕事を通してドイツ軍隊の進撃に関連する研究に熱中する機会を持った。当時グレーナーは、「鉄道制度についてまだ何も知らなかったにもかかわらず、これが鉄道への私の愛着の礎石となった。」と語った⁽¹²⁾。この時以来、鉄道と進攻の概念は、グレーナーにとって分離しがたいものになったのである。

グレーナーは、鉄道課の分遣隊中尉から、大尉と運行ルートの作成者を経て、セクションII aのチーフとして少佐に就任し、そしてその後、鉄道課の課長に、戦争中には簡便に敷設できる狭軌鉄道、つまり野戦鉄道 (Eisenbahnwesen) の責任者に出世した。その間にグレーナーは、一八九九年三月二五日にプロイセン参謀本部付きの大尉に昇進したが⁽¹³⁾、当時の参謀本部はシュリーフェン計画で有名なシュリーフェン將軍 (Alfred Graf von Schlieffen, 1833-1913) が参謀総長を務めていた。「私は、シュリーフェンをしばしば見かけたし、彼の有名な批判と発言のいくつかを聴いたことがあるが、しかし重要でない時のみ彼と向き合ったにすぎなかった。それにもかかわらず、私は自分が彼 (シュリーフェン) の時代に参謀本部で働らくことができたことを幸運と思っている。彼の精神との出会いは、私の軍事的思考と行動に決定的な方向を与えたのであった⁽¹⁴⁾。」その後一九〇六年まで、グレーナーの活動は、セクションII aを舞台に、シュリーフェン計画の進攻作戦と兵員・物資の動員と補給のための輸送計画の研究に集中した。それは、経済問題の研究から、兵站庫の設置、大量輸送手段としての鉄道、さらには電信・電話、また飛行機の利用にいたるまで、シュリーフェン計画を実現するのに必要なすべてについての研究であった。やがて一九〇六年のカイザーの誕生日に、グレーナーは少佐に昇進し、同時にセクションII aの指導をまかされるといふ名誉が与えられた。しかしその直前の一九〇五年に、第一次モロッコ危機と参謀総長の

第一次大戦中のドイツの国家社会政策 (一)

シュリーフェン將軍の解任という事態が発生した。⁽¹⁵⁾

この一九〇五年という年は、第一大戦開始前のドイツに重大な政治的不安と軍事的分野で重大な変化をもたらした。一九〇六年一月〜四月のアルヘシラス会議における第一次モロッコ危機とともに、ドイツの政治指導者はこの展開を静観しようと欲するか、あるいは、どのような手段でイギリス・フランスの合意を得ることができるかどうか、という問題に直面した。宰相ビューローは、変化した状況の結果について明確な認識を持たぬまま、「威嚇の政治」を行おうとした。しかし彼は、それを実行するという決心を下すことはできなかった。シュリーフェンは別であった。グレーナーによれば、「一九〇五年五月に、イギリスの雑誌『二〇世紀 (The Twentieth Century)』のなかにイギリスとフランスの同盟を要求する論文が現れた時、シュリーフェンは、この……論文を、カイザーとドイツ政府が対フランス戦争に踏み切るきっかけにしようとした。彼はこのようなやり方で、——彼はこのことを明確に認識していたが——わが国のまわりに固く張りめぐらされた網を引き裂くことを意図したのである。彼は、このチャンス二度と繰り返されない好機として捉えた。フランスの同盟国であるロシアが日本との戦争によって、そして国内での革命によってまったく交渉能力を失っている限り、わが国は敵国フランスを片づけることができる。そしてわが国は、フランスを制圧することによって、イギリスの陣営に決定的な一撃を加えることができるのである。」⁽¹⁶⁾ 参謀本部にいたグレーナーとその同僚たちは、当時は、未だ全体の状況を完全に見渡すことができなかった。彼らは、シュリーフェンが舵を握っている限り、政治とその軍事的結果について疑問を持つことはまっぴりなかった。「われわれはドイツの武器の優秀さを信頼しており、そしてそれを投入する用意があった。シュリーフェンが戦争に賛成する発言をしたことは知られていなかったが、しかしわれわれ

は、多かれ少なかれ、シュリーフェン男爵の意見と一致していた。」そしてグレーナーは、一九〇五年後の数年間と世界戦争の経験を踏まえて、「振り返えてみると、私は、はじめてシュリーフェン男爵の見解に確信を持って賛成することができるようになった。すなわち、私は防衛戦争を肯定したのである。」と語ったのであった。⁽¹⁷⁾シュリーフェンの目は、モロッコに向けられていたのではなかった。世界政策的な功名心や海上支配に向けられていたのではなかった。彼の目標は、明らかに、狭く設定されていた。彼は、イギリスとフランスの同盟によって——背後にはロシアが控えており——最も重大な威嚇にさらされるドイツ帝国の大陸内の権力地位の確保以上のものを欲しなかったのである。そしてこのような態度で、彼は「真に健全な世界政策」を擁護した。かくて、モロッコ危機の際に明るみにでたカイザーと宰相と、参謀総長のシュリーフェンとの間のまったく異なった態度が後者の解任の直接のきっかけとなった。一九〇六年一月一日に交替が行われ、後任としてモルトケ (Helmut von Moltke, 1848-1916) が就任することになった。

参謀総長としてのモルトケの最初の数年は、政治的には、その後続く危機の時代の始まりであった。それ故モルトケは、新しい状況に対し軍事的指導がいかに対応すべきかという困難な問題の前に立たされた。ドイツ艦隊とイギリス艦隊の緊張は、以前よりも、戦争の危険の可能性を増大させた。⁽¹⁸⁾イギリスとフランスの協商の輪郭が次第に明確になると同時に、ドイツでは不可能と考えられていたイギリスとロシアの提携も準備された。変化した力関係に、フランスの陸軍指導部は、このような力関係の変化に対応して次第に防衛から攻撃へと考えを変えていった。ドイツの陸軍指導部も、これらのヨーロッパの情勢を否応なしに考慮に入れざるを得なかったし、また同時に、これまでの軍事計画が新しい状況と一致しているかどうかを吟味すべく迫られた。その際モルトケ

には、一九〇五年のシュリーフェン計画の前提は一九〇九年の状態には適用されないと考えた。彼は、シュリーフェン計画の西部進攻の基本的な変更を決定した。すなわち、シュリーフェン計画では、右翼戦線に対する左翼戦線の兵力の割合は一对七であったが、モルトケは一对三に変更したのである。⁽¹⁹⁾しかしグレーナーは、当時からモルトケのこのような変更疑問を抱いていたように見える。「私には、変更の真の意味は一度も明確ではなかった。私は、わが軍が西部戦線に、ロートリンゲンと右翼戦線に二つの難点を形成したとき、わが国の作戦上の出口の状況がどの点で改善されたかを見ることができなかったのである。⁽²⁰⁾これに関連して、次のようなエピソードが残されている。それは、一九一三年にグレーナーがシュトゥットガルトから帰還した後、当時進攻課長であったルーデンドルフ(一九〇八〜一九一三年在任)は、彼に対し、ロートリンゲンにおけるフランス軍の進攻に対し第六連隊と第七連隊によって短期間に反撃すべきであるが、双方の連隊とも右翼戦線に配置されるという変更を説明した。グレーナーは、この説明には納得できなかったようである。後にグレーナーは、「世界戦争は、彼(ルーデンドルフ)が敵の数を余りにも低く評価したこと、及び彼がアメリカを考慮の外においたことを教えた」と書いたのであった。⁽²¹⁾

(4) 参謀本部の鉄道部門責任者としてのグレーナー

グレーナーが一九一一年一〇月にシュトゥットガルトからベルリンの参謀本部に呼び戻されて後、彼は陸軍中佐に昇進し、その時から鉄道局の責任者に就任した。一九〇四年にセクシヨンのチーフに就任して以来、彼は軍事的な鉄道制度の改善について多くの考えと計画を練ってきたが、今やその実現のために全力を尽す時機がきたの

であった。当時のグレーナーにとって最大の課題は、ドイツ鉄道網の構築であった。彼は、来るべき戦争では戦闘中の部隊の内部で、ある戦線から他の戦線への大規模な軍隊移動が必要となると確信していたので、西部ではライン河畔のリンツ (Linz)、ビンゲン (Bingen)、マックザウ (Maxau) にある古い浮橋の代わりに三つの橋を架け、東部ではいわゆる第三の輸送路マリーン (Marien)——リーゼンブルク (Riesenburg)——ヴォルムディット (Wormditt) の複線工事を行い、そしてドイツ国内では、七区間について通り抜け可能な四複線の輸送道路を建設するという提案を行った⁽²²⁾。またグレーナーは、一九一二年秋には、緒戦でのドイツの決定的な勝利の後に、三〇日間の移動日のうちにフランスから急遽、東部へ四軍団を輸送せよという命令が出されることを想定して作戦を練った⁽²³⁾。

やがてグレーナーは、鉄道課における活動を通じて、否応なしに経済と交通との解き難い結びつきを認識するようになった。動員の準備は、軍事的措置の経済的諸結果について熟慮せざるを得なかったわけである。動員と進攻が行われる時には、日常の公共交通に対し大規模な抑制が行われねばならない。それ故、平時時においても大都市と工業の中心に生活物資と原料を供給する列車の運行計画が立てられた。とりわけ、都市へのミルクの輸出を規制するためのいわゆるミルク列車の確保が必要であった。しかし、このように交通と経済が相互に依存しているばかりでなく、経済、技術、戦争指導も相互に依存していた。これら三つの要素の相互作用は大変重要であるため、一つの要素が突出しても非常に困難な結果に導くことになる。例えば、——後にグレーナーが回顧したところによると——戦争の初期に鉱山業から鉱山労働者を無計画に引き抜いたことが、戦争の全期間中には再び回復されない生産減退の原因となった⁽²⁴⁾。また食糧問題に関しても、鉄道局が軍隊の食糧輸送も行わなければならない

らなかったし、グレーナーが参謀本部の代表として、国民の食糧について帝国内務省との交渉に当たったので、彼はそれらの三つの要素の依存関係を深く認識するようになったのであった。

(5) 開戦とグレーナー

一九一四年の夏に、グレーナーはキッシンゲン (Kissingen) で四週間の休暇をとった後に、スイスでさらに長期の休暇をとり、その際スイスの参謀本部長のところまで週末を過ごしたいと思っていた。しかしスイスへ向かう途中、シュトゥットガルトに立ち寄った時、彼はオーストリアの王位継承者の暗殺の報を聞いた。彼はこの出来事に大変驚き、スイス旅行を中止することにした。しかし彼は、直ぐにはベルリンに直行せず、参謀次長のヴァルダーゼー男爵と手紙で連絡を取りながら、この事件をめぐる国の内外の情勢の展開を見定めてから七月二六日になってベルリンに帰還した。

グレーナーの見るところ、これらの日々は、参謀本部でも民間でも、なんらかの神経質な不安の徴候があるようには思えなかった。カイザーも二七日にベルリンに帰還したが、その時も彼は、普段と異なった出迎えをうけたわけではなかった。参謀本部も、いつもの夏の日々と同じように、すべてが静かであった。グレーナーの部局では、運行計画と進攻計画をもう一度吟味するよう提案した将校もいたが、彼はそれには取り合わず、ただ静かに自分の出番を待っていた。しかしその間にも、セルビアに対するオーストリアの最後通牒(七月二三日) ⁽²⁵⁾ が出され、戦争はほとんど避けられない情勢となってきた。グレーナーの見方では、オーストリア人は多くの貴重な時間を無為に過ごしているのであって、彼らは、暗殺の直後に戦争を開始しなければならなかったのである。彼ら

は、このことをドイツとイタリーに告げ、同時に自分らはいかなる征服も意図するものではなく、不穩の種を取り除こうとしているにすぎないのだということをきっぱりと声明すべきであったのだ。情勢は日増しに悪化していき、遂に七月三一日に、ロシアの全般的な動員命令に対応してわが国で戦争の危険が目前に迫っていることが語られるようになった時、グレーナーは、はじめて運行計画と進攻図面を用意し、これを各軍管区の司令部に伝達するために將校に旅行の準備を命じた。

これに対し民間の鉄道輸送の方は大混乱に陥った。戦争勃発の危険から、当然、外国へ旅行する国内外のすべての旅行者は押し戻されたが、これが鉄道輸送に混乱を発生させたのであった。しかし臨時列車の投入によって、さしもの混乱もほどなく克服された。貨物輸送の方はもっと多くの困難をもたらした。軍事運行計画が実行された時、民間の貨物は国境の駅や鉄道の交差駅にそのまま放置され、山積みにされた。だが、動員と進攻が通過した後には、滞貨の山も徐々に解消された。

ところで、ロシアとフランスにたいするドイツの宣戦布告（八月一日と四日）について、グレーナーは、「わが国が犯した最大の愚行であった、そしてそれは不必要なことでもあった」と述懐している。⁽²⁶⁾その理由は、日露戦争以後は、軍事的集団の間では形式的な宣戦布告はもはや考慮の外におかれていたからである。対ロシアの宣戦布告について言えば、帝国宰相ベートマンは、社会民主党の態度を考慮してこれが必要なものと考えたのに対し、ファルケンハイン（Erich von Falkenhayn, 1861-1922）とモルトケが共同して、八月一日の正午に「ロシアに対する愚かな、急ぎ過ぎの宣戦布告」を阻止しようと動き出したが、しかしそれは余りにも遅すぎた。対フランスの宣戦布告については、外務省の法律顧問の影響のもとで、わが国がベルギー通過進攻のための緊急権を要請するこ

第一次大戦中のドイツの国家社会政策 (一)

とができるために、とりあえずフランスと戦争状態に入らねばならないという法的思考から宣戦布告が発表されたが、軍事の実戦の観点からは、なにも最初の動員の日にあわせて仰々しく宣戦布告を発表する必要はなかったのである。さて、動員令の発表とともにグレーナーの仕事は、急速に忙しくなった。動員の初日と翌日は、鉄道が主役であった。動員と軍隊の輸送のための貨車、機関車、客車の移動が円滑に行われたが、もともとこの両日の輸送計画は、すでに戦争前に十分練られていたものであった。八月三日から四日にかけての真夜中に、公的交通をほとんど完全に停止して大規模な軍事運行計画がはめ込まれたが、これに続いた食糧輸送とともに遅滞なく実行された。開戦当初このように鉄道輸送がまるで「時計仕掛けのように」精確に行われたのは、まさしくグレーナーの功績として評価されたため、「誰もが、彼と友人になることを欲し、カイザーもまた鉄道の活動に非常に満足した」のであった。⁽²⁷⁾かくてその後、グレーナーはカイザーの信頼を獲得する一方で、戦時の食糧輸送問題のスペシャリストとしてルーデンドルフから政治的指導部への参加を要請されることになるのである。

(1) 以下の叙述は、主としてグレーナー自身の『自伝』に拠った。Wilhelm Greener, Lebenserinnerungen: Jugend, Generalstab, Weltkrieg, herausgegeben von Friedrich Frhr. Hiller von Gaetringen, mit einem Vorwort von Peter Rassow, Neudruck der Ausgabe 1957, Osnabrück 1972, S. 31 ff.

(2) Ibid., S. 31.

(3) Ibid., S. 32.

(4) Ibid., S. 32, 33.

(5) Ibid., S. 35, 36. 彼は、ドイツ帝国軍人として、プロイセン主導の立場、君主制の支持、及び保守主義的態度を備え

ていたが、しかしこれらは、「子どもの頃から南ドイツの生活環境の中で培われた民主主義と議会主義に矛盾しなかった。」(Dorothea Groener-Geyer, General Groener: Soldat und Staatsmann, Frankfurt a. M. 1955, S. 17) 後年、第一次大戦末期からワイマル期にかけて、グレーナーが政治的指導者として活躍することができた精神的土壌は、すべてこの頃から自分のものになっていたのである。

- (9) W. Groener, op. cit., S. 37.
- (7) Ibid., S. 43.
- (8) Ibid., S. 44.
- (6) Ibid., S. 51.
- (10) Ibid., S. 55.
- (11) Ibid., S. 58.
- (12) Ibid., S. 66.
- (13) ドイツ帝国の軍事指導の中心部であるプロイセン参謀本部のポストは、プロイセン出身者によって占められていたが、グレーナーは、この昇進によってそのポストに就任した最初の南ドイツ人であった。(Dorothea Groener-Geyer, op. cit., S. 23)
- (14) W. Groener, op. cit., S. 68-9.
- (15) Vgl. Petter Rassow, Schlieffen und Holstein, in: Historische Zeitschrift, Band 173, 1952, S. 297-313 u. Gerhard Ritter, Der Schlieffenplan: Kritik eines Mythos, München 1956, S. 102ff.
- (16) W. Groener, op. cit., S. 83-4.
- (17) Ibid., S. 84.

第一次大戦中のドイツの国家社会政策 (一)

- (18) グレーナーは、ティルピッツの建艦政策にたいし批判的であった。「私は、陸軍の中の多くの将校と同じように、ティルピッツの艦隊建造政策に賛成ではなかった。——ドイツの魂、力の源泉は、大陸本土にある。それ故、われわれは世界政策と建艦政策に大々的に着手する前に、最初に大陸本土を保証しなければならない、そしてそこで始めて、わが国の背後は自由になるのである。」(Ibid., S. 6.)
- (19) Ibid., S. 93. 戦後、開戦当初のドイツ軍のミルギー進攻はイギリスに参戦の口実を与えたという批判が、シュリーフェンの作戦に対する非難と結びついて出されたが、グレーナーは、「リュッツティッヒ (Luttwich) の不意討ちは真のシュリーフェン計画には存在しなくて、一九〇九年の変更の際にはじめてモルトケによって紛れ込まれた」(Ibid., S. 147) と反論した。シュリーフェンとモルトケの違いについては、vgl. ibid., S. 148ff.
- (20) Ibid., S. 93.
- (21) Ibid., S. 95.
- (22) Ibid., S. 131.
- (23) Ibid., S. 133.
- (24) Ibid., S. 134-5.
- (25) Ibid., S. 141.
- (26) Ibid., S. 142.
- (27) Ibid., S. 144.

(未完)